Aoyama Gakuin Archives Letter

青山学院資料センターだより28号

Proof from
ADVERTISING DEPARTMENT
The Christian Advocate
150 Fifth Avenue
NEW YORK, N. Y.

Theological Students and Barracks at Aoyama Gakuin, Tokyo.

AOYAMA GAKUIN

In the earthquake of 1923 our great Methodist school in Tokyo lost all its buildings.

Many of these have been replaced by fine earthquake-proof buildings—the gift of America and of the Japanese alumni.

This is the largest school our Church has outside the United States.

In its four departments it has 3,500 students.

Temporary barracks still house the department which trains young men and women for the Christian ministry. With 130 students, this is one of the largest schools of its high class in the mission field.

$100,000 will give this school the earthquake-proof Building shown in the architect's plan below.

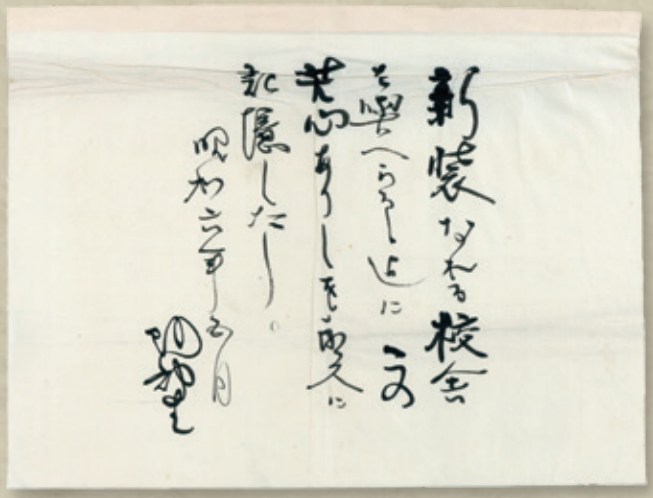
To give this Building—or to help give it—may be your great missionary gift to the Saviour!

WHO WILL GIVE THIS BUILDING—WILL YOU?
DO YOU KNOW SOMEONE WHO WILL? TELL US!

This old building stood 40 years and from it 200 young Japanese preachers went forth to preach Christ's gospel.

A Building like this will stand through the years to come — and from it will go forth — no one knows how many — Japanese young men and women ready and eager to make Christ known to Japan.

The Dean of the Theological Department, Rev. A. D. Berry, is eager to correspond with, or to go to see, anyone who may be interested in this Building. Write him at 150 Fifth Avenue, New York City.



新装なれる校舎を與へらるゝ迄にこの苦心ありしを永久に記憶したし
昭和六年五月　阿部生

青山学院震災復興募金キャンペーンの広告

1923年9月1日の関東大震災にて甚大な被害を受けた青山学院は、アメリカのメソジスト監督教会などへ復興支援を呼びかけ、校舎の再建に着手した。その中で最後となった神学部校舎の再建にあたり、神学部長であったアーサー・D・ベリーは、阿部義宗中学部長とともに渡米し、精力的に募金活動を行った。その際に配布されたのがこの *The Christian Advocate* の号外である。神学部校舎建築への寄付について次のように呼びかけている。

WHO WILL GIVE THIS BUILDING —WILL YOU？
DO YOU KNOW SOMEONE WHO WILL？ TELL US？

上部の写真は震災後に校舎として使用されたバラック校舎、下部左の写真は震災で大破した神学部校舎、下部右の写真は再建予定の神学部校舎計画図。

ベリーと阿部による募金活動の結果、多額の寄付金を得ることができ、1931年5月に神学部校舎が竣工し、ベリーの功績を讃えてベリー・ホールと名付けられた（現在の青山学院本部棟）。

右側の記述は神学部校舎落成時に阿部義宗により記されたもので、「新装なれる校舎を与へらるゝ迄にこの苦心ありしを永久に記憶したし　昭和六年五月　阿部生」とあり、この募金活動が極めて困難であったことを物語っている。

青山学院史探訪
スクーンメーカーと福澤諭吉～津田仙という接点～その３　川島祥子—2

資料センター所蔵資料紹介
青山学院中学部生が記した関東大震災の記録「震災記」　佐藤大悟—4

資料センター利用状況・日誌抄—6

受入れ資料—7

利用案内ほか—8

スクーンメーカーと福澤諭吉～津田仙という接点～その3

元幼稚園教諭　川島 祥子

1. 福澤諭吉の女性論・家庭教育論

福澤は、日本の近代化のために学校教育の普及を強調したが、徳性の涵養のためには家庭教育が重要であることを説いた。1896（明治29）年の慶應義塾旧友会で行われた演説の一説にも、慶應義塾の目的として「我日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し、これを実際にして居家、処世、立国の本旨を明にして」とある通り、家庭を第一に置いている。しかも、家庭教育の原則は、男女共通にして独立自由な人格の育成にあるとした[1]。特に、旧体制が崩壊した故郷中津の人々に指標を与えたとされる、1870（明治3）年1月に執筆した「中津留別（りゅうべつ）之書」においては、「人は万物の霊なりとは、……天道に従て徳を脩め、人の人たる知識聞見を博くし、物に接し人に交り、我一身の独立を謀り、我一家の活計を経てこそ、始て万物の霊と云うべきなり。……人倫の本体は夫婦なり。……天の人を生ずるや、開闢の始、一男一女なるべし。数千万年の久しきを経るもその割合は同じからざるを得ず。……又男といい女といい、等しく天地間の一人にて軽重の別あるべき理なし」[2]と文明国を論じるにあたっては女性の地位を論じないわけにはいかないのである。さらに、「日本婦人論　後編」では、「男女ともに万物の霊なり、男子なくしては国も立たず家も立たずと云わば、女子なくしても亦国家あるべからず……」とある[3]。男子女子ともに同等であり、等しく国家を形成していくということである。この女性論の背後にあって、スクーンメーカーとアリス・エリナ・ホアという2人の宣教師の存在が、福澤の女性論に実体を与え、生涯のテーマにふさわしいものとさせたと筆者は推測する。

2. 福澤の婦人宣教師ホアへの関り

では、ホアとの関りについて、白井堯子氏の『福沢諭吉と宣教師たち』[4]及び「宣教師と福澤諭吉の『知識交換世務諮詢』―オックスフォード資料が示す新事実から―」[5]から、教えられたい。白井氏はオックスフォードの図書館で英国国教会の宣教団体SPG（Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts）の資料の中に約150通の書簡を見つけた。白井氏は、そこに発見したアレクサンダー・クラフト・ショーやホア、そしてアーサー・ロイドたちが送った書簡と日本側の資料を重ね検討し、福澤と英国宣教師の関係、福澤のキリスト教観に新しい光を当てた。

それによれば、ショーは、週に2度、「モラル」の授業として聖書を教え始め、1875（明治8）年8月に、キリスト教をさらに詳しく学びたい少年に対して週に2度夜のクラスを開いていたが、1875（明治8）年11月には、SPGから半ば独立した女性宣教団体“Ladies’ Association”からホアが女性宣教師として初めて日本に派遣されることになる。その3か月後には、ホアは福澤家の2階に住み少女のための塾を開きキリスト教教育を始めた。つまり、福澤がホアに対して福澤家を塾として提供したのだ。実際に、1876（明治9）年3月から3年間私雇いの英語教師という名目で東京府に公式に届けられている。塾の少女たちは福澤が集めていたとのこと。ホアが教えたのは、英語、裁縫、編み物、讃美歌であった。ホアの塾は慶應義塾敷地内で行われた女子教育の先駆となった。さて、ホアもスクーンメーカー同様、外国人居留地以外にキリスト教を教える目的で寄宿学校を建てることの意義を重要視していた。1876（明治9）年10月のホアの書簡には、「なかなか、こうありたいと願うようには、事は運びません。しかし、私の仕事は遅々としたものであっても、着実に進んでいると思います。私が現在考えているのは、この仕事は孤児院をつくる方向に向けられるべきだということです。そして、その孤児院で、クリスチャンの教師を育てていくのです……」[6]。困難な中にも次のビジョンを見据え続けている姿の中に、「たった一人で異文化の極東の地にやってきたホアの信念、勇気、努力は、家族制度の枠内に縛りつけられていた当時の日本女性には見られないものであったろう。」と白井氏は考察している[7]。

3. スクーンメーカーの存在

以上の一連の出来事を時系列的に見たとき、こ

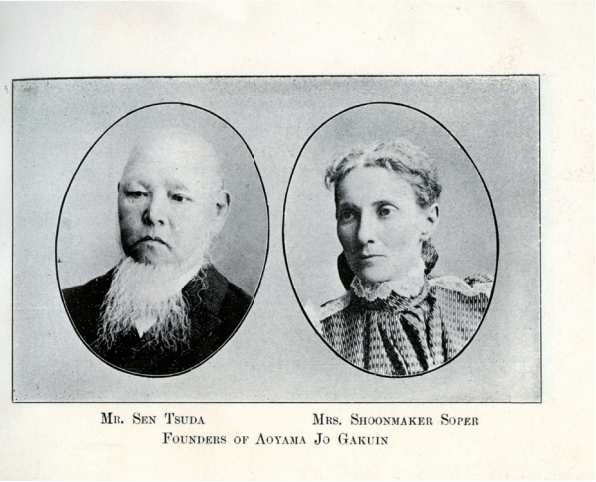
こに同じく寄宿学校をと願い奮闘したスクーンメーカーの存在が注目される。福澤は、ホアを受け入れる以前にスクーンメーカーの労苦や男性と対等にかつ自立的に生きているその姿に、つぶさに接してきたであろう。ホアが来日した1875（明治8）年11月は、スクーンメーカーが三田の大聖院で「救世学校」を開学したときである。スクーンメーカーの労苦を見聞きした福澤は、ホアの志が頓挫しないようにと配慮し、すぐさま自宅をホアの望む塾として開放したのではないか、と筆者は推察する。

さらに、ホアが福澤家で塾を継続している間に、1876（明治9）年2月に救世学校の看板をはずさざるを得ないスクーンメーカーの苦労を、ホアの働きに接してきた福澤は間近に実感をもって感じてきたのではないだろうか。その後、奇しくも、1877（明治10）年1月にはスクーンメーカーは築地にて海岸女学校開校にこぎつけ、一方で、ホアは同年8月に芝に構えたショーの新居に移動し、寄宿学校を開校した。

前号に記載のように、福澤は、公開試験の際に、また教師を派遣するという形で海岸女学校に続けて関っている。ホア以前に、スクーンメーカーの労苦にも接してきた福澤は、身近にこの2人の女性宣教師の存在を通して、その女性論を確かなものとして主張したと筆者には解せられるのである。幾重の困難に直面しながら、神のみこころ故に敢然と困難に向き合い歩んだスクーンメーカーの姿は、女性の地位や社会や国家における女性の責任について具体的な姿をもって示唆を福澤に与えたのではないだろうか。白井氏に則って紹介すれば、福澤の婦人論に次のような一文がある。「西洋の婦人は概して責任の重き者と云わざるを得ず。……責任の重きこと斯くの如くなればその苦楽も亦大なり、……我輩の所望は、我日本の女子をもその進歩の第一着として先ず西洋の女子の如くならしめんと欲するに在り、」[8]この福澤のことばは、実際に責任と使命とをもって日本において生きた2人の女性の実例がなければ、生まれてこないと筆者は推測する。

4. スクーンメーカーの残したもの

スクーンメーカーは青山学院創立の三つの種の一つとして確かな土台を築いた。しかし、そのことにとどまらず、福澤の国家観の根底にあった女性観、家庭観の裏打ちとなるものを与えたと考えるべきである。つまり、スクーンメーカーは日本の近代を模索した一思想者に深い影響を与えた。神は、津田仙を接点にして、ジュリアス・ソーパー師、スクーンメーカーという伝道と教育という線を引き、次に福澤諭吉という点につなげられたのだと思う。そして婦人宣教師を通して、福澤に婦人論を展開せしめ、日本の近代の進むべき姿の思索の肉付けをさせてきたのではないか。一人の人の思想形成に影響を及ぼすものは、単に理念の面だけでなく、その理念を体現している存在そのものとの心震えるような出会いがなければ、思想の肉付けはできない。



津田仙とスクーンメーカー（AOYAMA JO GAKUIN 1901年）

異国の町の中に果敢に出て行ったスクーンメーカーは、女子教育を通して神の国の参与を果たすという神からの使命を、身をもって実現しようとした。その姿は思わぬ形で一思想者に影響を与えた。この現代に生きるキリスト者も、世界が直面する課題に対して、聖書の真理から導かれる理論を考え抜き実践していくことが求められる。それは理論の世界で終わるのでなく、“Butterfly effect”のようにやがて社会に影響を及ぼすことをスクーンメーカーは教えてくれている。

註
[1]「福沢諭吉の家庭教育観」渡辺徳三郎　日本教育史学会発表論文
[2]「中津留別の書」『福澤諭吉著作集』第10巻　p2
[3]「日本婦人論　後編」『福澤諭吉著作集』第10巻　p60
[4]未来社　1999年
[5]交詢雑誌　第430号　2000年6月20日号　p25
[6]『福沢諭吉と宣教師たち』白井堯子　未来社　1999年　p150
[7]前掲書p157
[8]「日本婦人論」『福澤諭吉著作集』第10巻　p22

青山学院中学部生が記した関東大震災の記録「震災記」

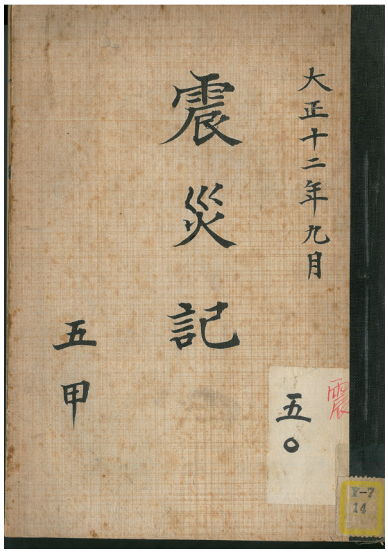
大学附置青山学院史研究所助教　佐藤 大悟

今から100年前の1923（大正12）年9月1日11時58分、関東大震災が発生した。マグニチュード7.9と推定される本震とその後の余震は東京・神奈川を中心に大きな被害をもたらし、死者・行方不明者数は約10万5000名を超えた。

青山学院は火災の被害こそなかったが、神学部校舎（1886年竣工）、中学部校舎（1906年竣工）、大講堂（1907年竣工）、高等学部校舎（1918年竣工）といった煉瓦造の建物を全て失い、中学部寄宿舎など木造の建物をわずかに残すのみとなった。青山女学院は代官山新校舎を失うも、同様に青山の木造校舎は残った。構内での人的被害はなかったが、青山学院は中学部生4名と高等学部生1名、青山女学院は生徒2名を失った。そうした青山学院の被災とその後の復興の状況は同時代の『青山学報』に詳しく報じられている。一方、今回紹介する「震災記」は、公的記録には見られない青山学院中学部生の震災体験を伝える史料である。

「震災記」内訳

組	人数	枚数
1甲	43	66
1乙	39	65
1丙	49	69
1丁	42	54
2甲	51	81
2乙	46	71
2丙	46	60
2丁	40	64
3甲	50	132
3乙	46	112
3丙	47	116
3丁	52	141
5甲	39	96
5乙	27	59
計	617	1186



「震災記」表紙

左下に掲げる表の通り、「震災記」は中学部1～3年の甲・乙・丙・丁組、5年の甲・乙組の計14冊が現存する。4年の分はなく、作成されたかも不明である。執筆者数は1年生173名、2年生183名、3年生195名、5年生66名の計617名で、1923年度末の在籍生徒数934名から4年生187名を除いた747名のうち、約8割が執筆したことになる。1・2年生は原稿用紙1～2枚、3・5年生は原稿用紙2～3枚を平均して書いている。

「震災記」は中学部がバラック教室での授業を再開した10月10日以降、「国語及漢文」の時間の課題として書かれたと考えられる。1年生には「大正十二年九月一日」の題が与えられたようだが、他の学年は任意の題を付けている。執筆年月日は1923年10月から翌1924年1月までと揃っていない。1年丁組の亀山という生徒の原稿には10月24日書、12月5日清書とあるが、同じ組ながら10月24日とだけ記された原稿もあり、収録される全ての原稿が清書を経たかは分からない。

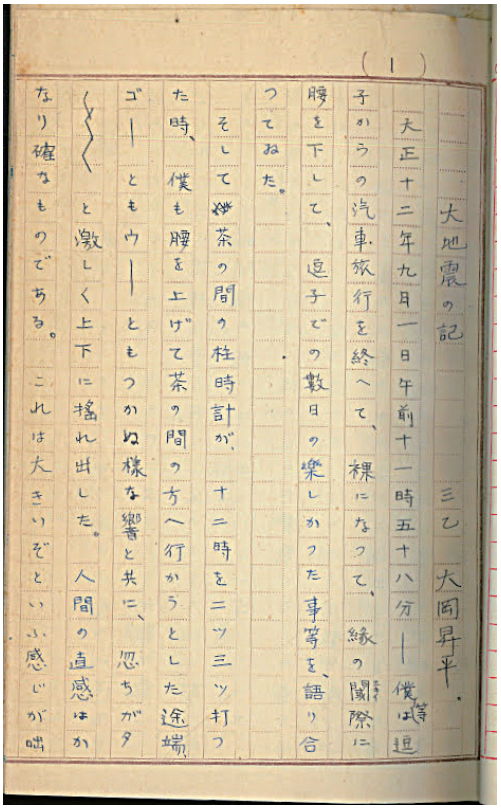
資料センターが所蔵する大正記念文庫係の「金銭出納簿」を見ると、1923年12月30日付で「震災記ヲ五年組生徒ニ書カシムル原稿紙十四帖代」、1924年2月11日付で「震災記用原稿紙十帖」と「表紙六枚」、4月15日付で「震災記表紙四組」の代金が計上されている。おそらく1924年にかけて現在の「震災記」に製本され、他に収集されていた震災関連書籍とともに図書室に保管されたのだろう。

「震災記」の内容は生徒それぞれの震災体験を反映して千差万別だが、山手や郡部の自宅で震災に遭遇する傾向が最も多い。青山学院は現在と同じ場所、当時の住所では東京府豊多摩郡渋谷町青山南町七ノ一という、東京市より西の郡部に位置していた。それを反映して生徒の家も地震や火災の被害が割合小さかった山手や郡部に多く所在していた。

夏休み中のため自宅にいた生徒は、地震の発

生とともに外に飛び出す。家は屋根瓦や壁土の一部が落ちる程度で全壊には至らず、負傷もしない。東に火事の煙が見え始めて不安が募るなか、土曜日のため東京市内に出勤していた父や兄が帰宅する。家に入らず野宿をするが、眠れない夜を過ごすというのが平均的な事例である。朝鮮人に関する流言飛語が飛び交う様子や、自ら自警団に加わった体験を記すものも2割弱あり、学年が上がるにつれて流言に踊らされた当時の状況への批判を記す傾向にある。

上記の事例とは必ずしも一致しないが、例えば後に小説家となる大岡昇平は3年乙組に在籍しており、震災当日の松濤の自宅における体験を原稿用紙4枚に記している。大岡の自伝『少年』（筑摩書房、1975年）の記述と読み比べてみるのも一興だろう。


大地震の記　三乙　大岡昇平

大正十二年九月一日午前十一時五十八分――僕は等
子かうの汽車旅行を終へて、裸になって、縁の闌際に
腰を下して、逗子での數日の楽しかった事等を、語り合
つてゐた。
そして茶の間の柱時計が、十二時を二ツ三ツ打つ
た時、僕も腰を上げて茶の間の方へ行かうとした途端
ゴ――ともウ――ともつかぬ様な響と共に、恐ちがタ
と激しく上下に搖れ出した。人間の直感はか
なり確なものである。これは大きいぞといふ感じが咄

大岡昇平「大地震の記」

帰省先や旅行先で地震の報に接する場合も見られる。東京の被害を伝える号外が各地にもたらした波紋や、親類縁者の無事を祈って過ごした日々が記録された。書くことがなかったためか、上京後の焼け跡巡りを記した原稿も多い。

数は少ないが、地震や火災からの生還を記す原稿は、震災の恐ろしさをよく伝えている。後に劇作家となる岸井良衛（本名は岸井良雄、2年乙組）、俳優となる岸井明（1年乙組）の兄弟は小田原で地震に遭い、全壊した家に閉じ込められた。幸い父母兄弟や女中は無事に家から脱出できたが、近所の病院にいた祖母は建物の倒壊と火災によって帰らぬ人となった。岸井良雄は「僕等は知らず知らず神に「この不思儀（ママ）な震災、人間のどうにも出来ない不思儀な力。それは矢張り神様の不思儀な御力に頼るより外はないのです」と祈った」と文章を結んでいる。

1年甲組の小崎という生徒が地震に遭ったのは、運悪く浅草見物をしている時だった。凌雲閣（浅草十二階）が途中で折れる様子を目の当たりにした後、急いで帰途に就いた。電車も自動車も人力車も使えず、家への電話も通じない。歩いて帰る途中、神田で火事に遭遇するもそれを迂回し、「青山にちかづくにしたがって倒れた家がすくないので喜ろこんだ」。「やっと家に帰へると母が心配をして角口まで出むかへてくれた」という。「それから学校にきてみると目ちゃ目ちゃにこはれてゐる」とも書いている。

意外にも、このように震災当日の青山学院の状況を記すものはわずかである。藪内敬之助高等学部長の家にいた根本（3年甲組）という生徒によると、本震で「大講堂は大音響と共に白煙に包まれ彼の輝ある歴史を今や惜まずと煉瓦の大塊を投げ出した、我が中学部校舎の一劃も凄惨なる破れ方をなし」、直後の余震で「講堂校舎は再び大破の業を初（ママ）めた」。構内で一晩を過ごし、翌朝目を覚ますと校庭に避難民が集まっていた。「間もなく騎兵第一聯隊の組織した救護隊の一隊」が「学院の芝生を根拠とされて此の方面の救護」を始めた。混乱と流言のなかにあって、「学院に住む人は忠実真面目なる朝鮮学生を友とし騎兵救護班に守られて本当に安らかに過し得た」と書き留めている。

以上紹介した他にも、「震災記」は興味深い記述を豊富に含む。災害史研究の観点からの本格的な検討が待たれるところである。

資料センター利用状況等（2022 年度後期利用状況）

1. 月別利用者数（　）内は前年度の数

		10 月		11 月		12 月		1 月		2 月		3 月		計	
展示見学者数		145	(60)	500	(85)	477	(146)	86	(13)	57	(8)	300	(40)	1565	(352)
資料閲覧者数		11	(9)	10	(8)	3	(7)	7	(7)	6	(0)	4	(6)	41	(37)
閲覧者の区分	本学学生	3	(3)	4	(1)	2	(4)	3	(1)	0	(0)	0	(0)	12	(9)
	現教職員	5	(5)	4	(4)	1	(1)	2	(5)	3	(0)	1	(4)	16	(19)
	旧教職員	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)	1	(0)
	校友	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)	1	(1)	3	(1)
	他大学教員		(0)		(0)		(1)		(1)		(0)		(0)		(2)
	牧師		(1)		(0)		(0)		(0)		(0)		(1)		(2)
	一般	2	(0)	2	(3)	0	(1)	2	(0)	2	(0)	1	(0)	9	(4)
利用の目的	教会史編集	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(1)	2	(2)
	学校史編集	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	著述・論文作成	3	(0)	7	(3)	0	(6)	3	(6)	1	(0)	0	(0)	14	(15)
	伝記資料調査	1	(1)	1	(1)	0	(0)	0	(0)	2	(0)	0	(0)	4	(2)
	記録類の調査・研究	2	(1)	0	(2)	3	(1)	4	(1)	3	(0)	1	(1)	13	(6)
	その他	5	(6)	2	(2)	0	(0)	0	(0)	1	(0)	2	(4)	10	(12)
資料の種類	青山学院史関係（AA）	63	(6)	85	(5)	33	(3)	50	(4)	52	(0)	78	(4)	361	(22)
	メソジスト教会関係（B）	1	(0)	20	(1)	0	(2)	0	(0)	0	(0)	1	(1)	22	(4)
	英語・英文学関係（旧F）	0	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(1)
	明治期キリスト教関係（旧G）	0	(0)	4	(0)	0	(1)	0	(2)	2	(0)	0	(0)	6	(3)
	一般分類図書	8	(1)	12	(2)	0	(3)	64	(1)	1	(0)	1	(0)	86	(7)
	その他	4	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	18	(0)	1	(1)	23	(2)

※ 利用の目的・資料の種類は重複回答あり
※ 2022 年度分より閲覧者区分の他大学教員・牧師は一般に含む

2. 月別レファレンス件数（　）内は前年度の数

		10 月		11 月		12 月		1 月		2 月		3 月		計	
件数		13	(11)	8	(14)	10	(7)	7	(7)	5	(7)	10	(8)	53	(54)
質問者の区分	学生	2	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	5	(0)
	現教職員	6	(7)	5	(6)	8	(6)	3	(4)	5	(5)	6	(4)	33	(32)
	旧教職員	2	(0)	0	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)	3	(1)
	校友	2	(0)	0	(1)	0	(0)	1	(0)	0	(0)	2	(1)	5	(2)
	一般	1	(4)	2	(6)	1	(1)	2	(3)	0	(2)	1	(3)	7	(19)
質問内容	文献所蔵調査	3	(3)	5	(8)	4	(3)	3	(0)	3	(1)	5	(1)	23	(16)
	写真所蔵調査	5	(4)	0	(2)	2	(1)	1	(2)	0	(1)	4	(0)	12	(10)
	事項調査	4	(4)	3	(4)	2	(3)	3	(5)	2	(4)	1	(7)	15	(27)
	その他	1	(0)	0	(0)	2	(0)	0	(0)	0	(1)	0	(0)	3	(1)

3. 日誌抄

2022年
10月
・未来構想委員会主催講演会に出席
・人事部主催「図解力向上研修」に出席
・展示製作会社（2社）、女子短期大学図書館を視察
・全国大学史資料協議会 神奈川県立公文書館を見学
・防災館体験学習に参加
・2022年度第2回資料センター展示委員会を開催
・2022年度第2回資料センター運営委員会を開催
・創立150周年記念事業実行委員会に出席
・防災委員会に出席
・歴史資料館開設準備委員会報告書の説明のため経営執行会議に出席
・全学院事務連絡会に出席

11月
・青山キャンパス17号館および相模原キャンパスB棟にてサテライト展示開催（11/4～12/24）
・特別展示準備のため展示ホールを臨時休館（11/7～11/14）
・歴史資料館開設における付議のため経営執行会議に出席
・特別展示「わたしたちの青短～青山学院女子短期大学の軌跡～」開催（11/15～12/24）
・創立記念礼拝に出席
・女子短期大学閉学礼拝のため創立記念日臨時開館
・青山スタンダード「日本事情VF」受講生、展示ホール見学
・大学特別入試応援業務

・全学院事務連絡会に出席

12月

・京都華頂大学様、展示ホール見学
・全学院事務連絡会（web会議）に出席
・大学入学共通テスト業務説明会に出席
・青山学報編集委員会に出席

2023年

1月

・全学院教職員新年礼拝に出席
・大学入学共通テスト応援業務
・フィルム資料、デジタル化のため業者へ貸出
・アサヒビール代表取締役社長、展示ホール見学
・『Aoyama Gakuin Archives Letter』27号発行
・青山学院オリジナルエンディングノート勉強会メンバー、展示ホール見学
・大学定期試験監督業務
・全学院事務連絡会に出席
・展示製作会社（3社）、間島記念館を視察

2月

・白石（詩人）研究者様、展示ホール見学
・大学入試期間のため展示ホール休館（2/7～2/18）
・大学入試業務
・全学院事務連絡会（web会議）に出席
・東呉大学（台湾）様、展示ホール見学
・展示製作会社、展示ホール視察

3月

・大判資料、デジタル化のため業者へ貸出
・2022年度第3回資料センター展示委員会を開催
・明治学院歴史資料館を見学
・臨時事務連絡会に出席
・創立150周年記念事業実行委員会に出席
・青山学院オリジナルエンディングノート勉強会メンバー、展示ホール見学
・展示製作会社選定審査会を開催
・展示製作会社選定審査会結果報告のため経営執行会議に出席
・全学院事務連絡会に出席
・青山学報編集委員会に出席
・大学学位授与式応援業務
・大判資料、デジタル変換データ納品

2022年度後期受入れ 資料

（学内部署からの移管資料は除く）

寄贈（敬省略、受入順）

株式会社国書刊行会

●『フルベッキ伝』井上篤夫著 国書刊行会 2022年9月

新田春信

●「青山学院大学神学科同窓会会報」No.55 2022年9月15日

安倍紀雄

●「<新館紹介>青山学院大学万代記念図書館」安倍紀雄著『大学図書館研究』71号別冊p73～82 抜刷冊子 2004年8月

小島道央

●『新島襄・本多庸一』砂川萬里著 東海大学出版会 1965年10月
●『海老名弾正・植村正久』砂川萬里著　東海大学出版会 1965年12月
●『内村鑑三・新渡戸稲造』砂川萬里著 東海大学出版会 1965年12月

三木はるか

●「書評：『近代日本の美術思想―美術批評家・岩村透とその時代』上下巻 今橋映子著」三木はるか著『ラスキン文庫たより』第84号 2022年10月1日

松岡正樹

●『マタイ傳福音書』四版、『クリスマスと新年との主なるキリスト（婦人の福音）』、『日曜学校対話集』第一・二編、『白き贈物 クリスマス執行準備』、『ゆきびら　少年讃美歌集』六版、『クリスマス礼拝執行順序 教会及日曜学校用』、日曜学校・バークレイ・京城・日本メソヂスト教会関連資料、写真ポストカードほか（写真①）

松山市教育委員会

●『SDGsと松山の先人たち』松山市教育委員会 2022年10月

宍倉文夫

●「寄稿：希望の灯火－竹岡教会創立130周年記念礼拝に参加して」宍倉文夫著『共助』第72巻第7号 2022年11月1日

青山学院高等部同窓会事務局

●「青山学院高等部同窓会報」Vol.83 2022年11月10日

株式会社京王エージェンシー

●「〔特集1〕大学の秘蔵コレクション 青山学院×140余年にわたる歴史的資料」『みんなの大学』Vol.29 2022年11月21日

石井浩

●『富之助とみよ あるブラジル日系人牧師の心の日本』石井浩著 柏艪舎 2022年11月30日

富澤為一

●『米山梅吉翁：慶應・明治、大正、昭和を生き抜いた日本の偉人：人物寫眞集：日本の実業家・歌人・漢詩人・俳人・教育者・政治家であり國際的人格者』米山聰編著 1997年4月

青山学院大学グリーンハーモニー合唱団OB会

●「グリーンハーモニー OB NEWS」No.66 2022年11月

五十嵐真希

●『詩人白石（ペクソク）：寄る辺なく気高くさみしく』アン・ドヒョン著 五十嵐真希訳 新泉社 2022年9月15日

青山学院大学英米文学科同窓会

●「Aoyama Sapience」第48号 2022年12月15日

株式会社有隣堂出版部

●『横浜共立学園の150年 1871-2021』『横浜共立学園の150年』編集委員会編 横浜共立学園 2022年12月31日

小林和幸（大学附置青山学院史研究所所長）

●『東京10大学の150年史』小林和幸編著 筑摩書房 2023年1月15日（写真②）

株式会社吉川弘文館

●『三笠宮崇仁親王』三笠宮崇仁親王伝記刊行委員会編 吉川弘文館 2022年12月2日

宇都宮美術館

●『二つの教会をめぐる石の物語』宇都宮美術館 2023年2月19日

大久保直美・松居恵美

●青山学院高等女学部卒業記念アルバム2601 1941年3月

金井文彦（職員）

●「2014年度～2022年度 青山学院女子短期大学閉学の記録」2023年3月

滝澤民夫

●「増野悦興の晩年の『日記』と日本同仁基督教会（三）」滝澤民夫著『同志社大学同志社談叢43号』抜刷 2023年3月1日

神直子

●2001年第7回平和・協同ジャーナリスト基金賞奨励賞 青山学院大学プロジェクト95 盾（写真③）、賞状 2001年12月6日

永野征男

●放課後かまくらっ子 放課後子どもひろばおなり、おなり子どもの家「こばと」開所式配布資料ほか 2023年3月21日

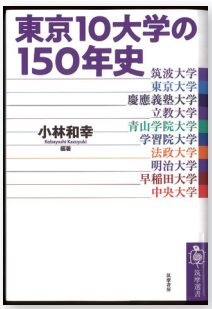
他大学・学校

●年史・紀要類

購入（受入順）

- 「日曜学校こども新聞」第70号、第80号、第81号、第82号、第89号　日曜世界社 1931年～ 1933年（写真④）
- 『新約聖書馬太傳 全』米国聖書会社 1904年3月31日（写真⑤）
- 寛永江戸全図 之潮編集部編 之潮 2007年12月10日
- 『タムソン書簡集』タムソン著 教文館 2022年3月
- 『井深梶之助宛書簡集：明治学院創立120周年記念1877～1997』秋山繁雄編 明治学院 1997年8月1日
- 「白百合のつゆ（古閑美子遺稿集）」古閑次郎編 1935年9月15日

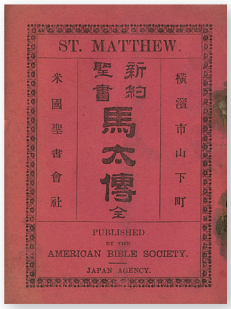
写真①全日本日曜学校大会



写真②『東京10大学の150年史』

写真③2001年第7回平和･協同ジャーナリスト基金賞奨励賞 青山学院大学プロジェクト95 盾

写真④『日曜学校こども新聞』第70号



写真⑤『新約聖書馬太傳　全』

相模原キャンパス開学20周年記念サテライト展示のお知らせ

相模原キャンパスは、今年で開学20周年を迎えました。そのことを記念して〝開学時の相模原キャンパス〟をテーマに、年間5回にわたりサテライト展示を開催しております。ぜひ、相模原キャンパスの歴史を振り返ってみてください。

会期：2023年4月～ 2024年3月（予定）　＊5回シリーズで開催

場所：相模原キャンパスB棟1階アトリウム（エスカレーター脇）

第2回サテライト展示の様子

青山学院資料センター利用案内

●展示ホールの見学

青山学院史関係資料の常設展示を無料にて一般公開しています。

開館時間

月～金曜日　9：30～17：00（入館は16：30まで）
土曜日　9：30～13：00（入館は12：30まで）
※夏期期間（8/1～9/14）
月～金曜日　9：30～16：00（入館は15：30 まで）
夏期期間の土曜日及び8月の水曜日は休館

●資料閲覧

青山学院史、明治期キリスト教関係資料などを公開しています。特定の研究目的を持って閲覧ご希望の方はメールにてご連絡ください。

閲覧時間

月～金曜日　9：30～16：30（11：30～12：30は閉室）
土曜日　9：30～11：30
※夏期期間（8/1～9/14）
月～金曜日　9：30～15：30（11：30～12：30は閉室）
夏期期間の土曜日及び8月の水曜日は休館

●休室日

日曜日･国民の祝日･夏期休業期間・クリスマス・年末・年始・その他青山学院が定める休日

●お問い合わせ

〒150-8366　東京都渋谷区渋谷4-4-25
間島記念館2階　青山学院資料センター
TEL 03（3409）6742
FAX 03（3409）8134
Email　ag-archives@aoyamagakuin.jp

青山学院ウェブサイト内に資料センターのページがあります。最新の情報および休室日の詳細はこちらからご確認ください。
https://www.aoyamagakuin.jp/history/mcenter/index.html

青山学院資料センター デジタルアーカイブ

資料センター所蔵の青山学院史関係資料のデジタルアーカイブを公開しております。ウェブ上でも青山学院の歴史に触れることができますので、ぜひご覧ください。
https://jmapps.ne.jp/aogaku/

資料センター運営委員

院長（職務上）	山本与志春
常務理事１名（職務上）	楯　香津美
学院宗教部長（職務上）	伊藤　悟
大学図書館長（職務上）	伊達　直之
青山学院史研究所長（職務上）	小林　和幸
大学　教員１名	岩井　浩人
高中部（高）　教員１名	中西　芳恵
高中部（中）　教員１名	森田久美子
初等部　教員１名	小林　寛
幼稚園　教員１名	河瀬ゆり子
総局長（職務上）	石黒　隆文
資料センター事務長（職務上）	岩本　智実

資料センタースタッフ

資料センター事務：
専任職員　2名
派遣職員　1名
パートタイム職員　2名
（週4日：1名、週5日：1名）
『青山学院150年史』編纂業務：
大学附置青山学院史研究所

Aoyama Gakuin Archives Letter
青山学院資料センターだより　28号
青山学院資料センター編・発行
2023年7月26日発行
印刷：三美印刷㈱
500部